



■病院スタッフと研究者で共に褥瘡回診を実施

看護研究に 新たな道を拓く

異分野融合を実践し医療を牽引

真田弘美氏は褥瘡医療（じよくそ う・床ずれ）において、臨床に基づく異 分野融合型（生体工学、分子生物学な ど、領域を超えた分野との協働）の看 護研究のパイオニアとして、約40年に亘 り革新的な研究活動を継続。その成 果が国内外の褥瘡ガイドラインに収載 されるほど、高い評価を受けてきた。

1998年、真田氏は北海道大学 名誉教授の大浦武彦氏らと共に日本 褥瘡学会を設立し、褥瘡医療におけ る、医師、看護師、薬剤師、管理栄養 士、理学療法士が協働する科学的エビ デンスに基づいた「褥瘡に対するチーム 医療」を確立。この体制にて開発され た画期的な褥瘡治療過程の評価法 「DESIGNER[®]」をもとに作成した「褥

推薦者

上田 泰己
東京大学大学院 医学系研究科 教授

須釜 淳子
公益社団法人 日本看護科学学会
副理事長

吉田 学
厚生労働省 医政局長（推薦時）

滑な連携を図ることができる、協調性を もった人材の育成」を目的とした、日本初 となる若手看護学研究者のための研究所 「GNRC（グローバルナースングリサーチ センター）」を東京大学に設立し、センタ ー長として時代の変革を見据えた社会シス テムづくりを提唱すべく、頑健な研究基盤 を築くための尽力を惜しみなく続けてい る。これからも、真田氏の看護研究および 看護領域にとどまらない先進的な活動 は、健全な社会の実現に向けてさらに歩 みを進めていくことであろう。

瘡予防・管理ガイドライン」をはじめとする ガイドラインの普及は、褥瘡医療の発展に 大きく寄与した。その後、日本における褥 瘡有病率は世界で最も低い数字となり、こ れら褥瘡医療の技術革新は国際的にも認 められ、賞賛と評価、そして大きな関心を 集めた。

真田氏は看護の研究領域から生じた疑 問に対して課題を見つけ、産学連携により 臨床で使えるツールを開発し、さらに検証 を重ねる「トランスレーション・リサーチ」 （橋渡し研究）の実践においても功績をあ げている。肉眼では同定できない深部損傷 への作用機序を解明するため異分野と融 合し、遺伝子、タンパク質レベルの検証を積 み重ねるといった体系的な開発研究の推進 と共に、皮膚の血流減少を「因」として生じ る褥瘡の予防を目的とした、携帯型圧力 測定器、皮膚の保護オイル、車いす用クッ ションといったグッドデザイン受賞製品を 含む、20を超える製品化に成功した。さ らに真田氏は、異分野融合型の先駆的な 看護研究を実践できる次世代看護学研究 者の育成、および世界に先んじて超高齢社 会に突入する日本であることを強みとする 開発研究などにも取り組み、国際規模で看 護に関わる研究領域を牽引。2013年 10月には、臨床現場に密着した理工学を 基盤とする開発型看護研究を実践し、特 許申請、製品開発、経済分析研究を診療 報酬に反映させるという新しい「トランスレ ーション・リサーチ」の方法論を看護理工学 として確立させ、医学、理・工学の研究者ら と共に「看護理工学会」を立ち上げた。

2017年4月、真田氏は「新たな技術 に挑戦しながらの看護学独自の理論や 理論の構築」とさまざまな専門分野を幅広 く理解する柔軟性と他領域の専門家と円



■スキン・インテグリティをテーマに15カ国以上の国から若手研究者や臨床家が集いサマープログラムを開催



さなだ ひろみ
真田 弘美
Hiromi Sanada

東京大学大学院 医学系研究科附属
グローバルナースングリサーチセンター
教授・センター長

Professor and Director, Global Nursing Research Center,
Graduate School of Medicine, The University of Tokyo

1979年聖路加看護大学卒業。聖路加国際病院内科病棟勤務、金沢 大学医学部研究生などを経て、1997年博士（医学）取得。1998年に金沢 大学医学部保健学科教授に就任。以降、日本褥瘡学会設立の一員とし て「褥瘡に対するチーム医療」を確立。その功績は国際的にも高く評価 された。その後、東京大学大学院医学系研究科健康科学・看護学専攻 老年看護学・創傷看護学分野の教授を歴任。2017年には、日本初とな る看護学研究所「グローバルナースングリサーチセンター」を東京大学 に設立。センター長として、他領域の専門家と協調できる若手看護学研 究者の育成などに尽力している。